

【人生最高の幸福は、
親や目上の人をはじめ、
人を尊ぶ事の中にある】

『光陰矢の如し』と申しますが、今年も気がつけばお盆の月を迎えました。4ヶ月前には新入学・新入社員などと言われて、ピカピカの一年生だった方々も、少しは新天地での空気にも馴染みはじめているのではないのでしょうか？新しい学校。新しい職場。ここでは貴重な仲間達との出会い。私達人間は、その場の環境や、周囲の人間の影響を色濃く受けて成長していくものです。その意味で、学校や職場、そしてそこで出会う友達や仲間というのは、自分の人生において掛け替えのない存在であるという事を認識しなければなりません。と同時に、自分自身もまた、周囲の人間に影響を与える存在であるという事を自覚しなければなりません。

先月の4日、真成寺にて《石崎産業株式会社（アイザック）様》から御依頼があつて、今年度の新入社員

研修をさせていただきました。新入社員の皆さんは、各地の大学を卒業したピチピチホヤホヤの若者達です。そこで、研修を受けるに当たり1つ宿題を提案させて頂きました。その宿題とは「両親の足の裏を洗い、その感想文を提出して下さい」というものでした。

この感想文は研修中に皆さんに発表させて頂きました。なかには「なぜこの様な事をやらなければならないのか？いまだに分かりません」という社員もおられました。大半は本当に素晴らしい感想文で、私の意図するところを理解して下さっている様でした。この宿題の意図するところは、『親への感謝。親の有り難みを感じてほしい。そして社会人となる自分への自立を促す』という事でした。

【感想文の御紹介】

素晴らしい感想文ばかりで、全部をご紹介させて頂きたいのですが、ここでは1つの感想文を取り上げて、以下に記します。

●（この方は母子家庭で育った男性社員です）：【親の足を洗った事で感じた思いが2つありました。それは「感謝」と「謙虚」です。私が触れた母の足はとても固く、女性の足というには遅（たくま）し過ぎるものでした。小学校の高学年から母子家庭となり、母親

が女手1つで私を育ててくれました。その過程では想像も出来ない様な辛い経験もあつたと思います。そうした経験がその足からヒシヒシと伝わり、改めて親への「感謝の気持ち」を持ちました。私は今まで親や家族をはじめ、沢山の縁ある人達に支えられて生きてきました。だからこそ、社会人となつた今は、皆さんからいただいた思い遣り、優しさをシッカリと受け止め、これからの長い道のりを焦らず、1歩1歩、歩んでいかなければならないと感じました。

また、これは実際に足を洗うまで気付かなかつた事です。足を洗う際にはどうしても腰を下ろし、首を垂れなければなりません。その姿勢でいると自然と「謙虚な気持ち」になり、相手の人間性を尊重する事の大切さを感じました。何でも当たり前になり、親や上司にでも同じ目線で話しては忘れがちになりますが、人との繋がりに必ず相手を尊重し、自分の事も大切に思う気持ちを忘れてはいけません。

これから私は営業として働く身です。お客様だけではなく、上司や同僚、現場の方々、そして家族など周りの皆さんへの「感謝の気持ち」を忘れずに頑張って働いていきたいと思えます。【この男性社員に対して私は、「よく

ぞそこまで感じ、悟ってくれた」という思いです。

『感謝と謙虚』はどちらも『当たり前』とは真反対の感情だと思いません。「当たり前」ではなく、「有り難い」有る事が難しい。稀であり、珍しい」という事です。

私達は往々にして「当たり前」と勘違いしてしまう事も多々あると思いますが、何でも当たり前になってしまつては、『本当に大切なモノ』を見失う事になってしまいます。

何事にも『感謝と謙虚』を感じる為には、今までの人生で作りに上げた自分の『心のモノサシ』とも言える固定観念を外し、新鮮な感情を心に帶し、前向きな気持ちを持つ努力をしなければなりません。これを仏教では「慈悲」。論語では「仁」。

一神教では「愛」という事になります。『慈悲・仁・愛』は自分中心主義ではなく、相手中心主義とも言うべき考え方です。こういう感情を中心軸に持つことにより、相手の気持ちばかり、相手を尊重する事を覚え、引いては自分が生かされていく事にも気がつくことが出来るというものです。私達は、その人生を通して、自分を磨く事を目的として生まれ、今を生きています。6月号

の『人生ハンド仏句』にも記しましたが、『他人原因説』ではなく、『自分原因説』で物事を見つめる時、私達日本人が古来大切に育んできた日本民族としての精神や、文化を取り戻す事が出来るのだと思います。また取り戻さなければ、私達の未来は決して明るいものではないでしょう。

「一番近くの深い」

ご縁を大切に

私達の人生を仮に八十年とし、オギャーと生まれてから1時間ごとに1人の人と出会うとしましょう。すると八十年間で何人の人と出会う計算になるでしょうか？ $365 \times 24 \times 80 = 702000$ とんで八百人となります。およそ七十万ですが、この数は多いでしょうか？少ないでしょうか？世界人類は七十億人とも言われ、日本国だけでも一億数千万人です。そう考えると、私達は一生のうちで出会う人間というのは、限られており、ほとんどの人と出会うことなく、その寿命が尽きてしまうという事になります。そう考えると、自分にとって一番近い他人は家族です。それから学校の友達や、会社の同僚や上司。七十万という限られた人数の中でも、特に同じ環境で、同じ時を共有する人間同士のご縁というもの

は、何と深い御縁なのでしょう。その御縁が深い人間同士『慈悲・仁・愛』を精神の中心軸に置き、『自分原因説』で物事を捉えようとする時、はじめて『当たり前』ではなく、『感謝・謙虚』という高尚な精神を味わえるものと思いうわけであります。人生はボーツとしておればアツと言う間に過ぎ去っていくわけですが、その短い人生の中でどれだけ『感謝・謙虚』の精神で物事や周囲の人と向き合っていけるか？そこに人生（魂）の幸福を得られる鍵が隠されているものと思います。

研修に参加された石崎産業株式会社（アイザック）新入社員の皆さんとの御縁は、私にとっても真成寺にとっても、本当に掛け替えのない出会いと経験を積む事になりました。心より感謝申し上げます。そして深い御縁を感じながら、感謝と謙虚な気持ちを持って頂けたなら、新入社員の皆さんの社会人生活は素晴らしいものになる事でしょう。

「ならぬことばならぬものです」

白虎隊で有名な会津藩（現在の福島県西部を治めた藩）には、什（じゅう）といつて、会津藩における藩士の子弟を教育する組織がありました。町内の区域を「辺」という単位に分け、辺を

細分して「什」という藩士の子弟のグループに分けたのです。什では「什長」というリーダーが選ばれ、什長は毎日、什の構成員の家の座敷を輪番で借りて、什の構成員を集めて「什の掟（じゅうのおきて）」を訓示していました。

会津藩の男の子供達は十歳になると日新館（にっしんかん）という藩の学校に入学する決まりになっており、6歳〜9歳までの幼い子供達は、入学前からシツカリとした生徒になるうとして自分達の町に子供達だけの集まりをつくりました。そこにはシツカリとした規則があり、会津の武士の子供はこの様にしなければならぬという心構えを教わりました。お互いに約束を決め、子供達の家を順番で会場にし、毎日熱心に反省会を行っていたといえます。

そしてその約束には絶対にそむかないよう努力したのです。その約束が「什の掟」でした。そんな幼少期をシツカリとした規則のもと育った子供達が、後に白虎隊として国家政情を何とかしようとする命をかけるわけですが、今月号の最後に、その規則はどの様なものだったのかをご紹介します。締めさせていただきます。

※ちなみに白虎隊というのは、会津藩が組織した十六〜十七歳の武家、男子によって構成された部隊でした。

【会津藩校日新館「什の掟（じゅうのおきて）」】

一、年長者の言うことに背いてはなりません
二、年長者には御辞儀をしなければなりません

三、虚言をいふ事はなりません

四、卑怯な振舞をしてはなりません

五、弱い者をイジメてはなりません

六、戸外で物を食べてはなりません

七、戸外で婦人と言葉を交えてはなりません

ならぬことばならぬものです。

七番目の婦人と言葉を交わさないという項目以外、現代でも通じる躰教育の根幹とも言えるべき教えであるうかと思えます。はたして現代でこうした規則を設けている家庭はどのくらいあるのでしょうか？私達は先人達の精神に学ばなければならぬ事が多々あると改めて感じる次第です。今月は御先祖様を偲ぶお盆月です。どうか、ご先祖様へ報恩感謝の気持ちを手向けて頂ければ幸いです。

合掌

副住職 谷川寛敬

